
われても末に

三嶋文絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

われても末に

【Nコード】

N6435T

【作者名】

三嶋文絵

【あらすじ】

お伽話めいた世界に迷い込み、友人たちともはぐれた志穂は、しかし慌てていなかった。あれやこれやの冒険の末に、全員揃って帰還できるのが、こうした場合のセオリーなのだから。外部サイト「みくり」掲載作品です。1章の長さが結構あるので、各章を分割しました。(2011/9/18)

第1章 旅立てる語（こと）

最後のチャイムが鳴り響いた。胃か腹の辺りに蟠っていた熱がほどけていくのを志穂は感じた。一年近い戦いがようやく終わりを告げたのだ。解放感というものを味わったことが未だかつてなかったかのように、信じられないほど身が軽くなって、家まで一気に走って帰れそうにさえあった。

問題用紙と筆記用具を手早くナツプサックに詰めて、隣りの教室へと急ぐ。さっと見渡せば窓際に友人の姿がすぐみつかった。

「美寒ちゃん！ 終わったねっ」

「……びっくりするじゃない」

教室の外へ、校舎の外へ、学校の外へと緩やかに流れ始めた人波の中を、逆行するように駆け寄れば、友人は目をぱちぱちさせてから苦笑した。

「どうだった？」

「中間テストと同じノリで訊かないですよ。余裕ね、志穂ちゃん」

「だといいけど。一応二分のーランクぐらい下げてるから」

こそつ、と声をひそめて囁く。美寒は気を悪くはしなかったが呆れた顔になった。

「わたしは、数学とリスニングが……苦手だから勉強頑張ったのになあ。全然聞き取れなくて」

「自分で思ってるより大丈夫だよ。美寒ちゃん心配性だもん」

喋りながら今度は人波に乗る。志穂にしてみれば試験の出来への不安など、受検を終えた事実の前では風の前の塵に等しい。高校予備生とでも呼んだ方が似つかわしいような日々はここまで、これからは心置きなく中学三年生を満喫できるのだ。浮き足立たずにいられようか。

外へ出るなり風がひゅうと音を立て、志穂は首を引っ込めるようにした。さむう、と大袈裟な声を出して、はしゃいでいる自分を実

感ずる。ぎりぎりのところで肩にも触れないショートヘアは大したことはないが、きゃ、と頭を押さえた美寒の、前へ回せば胸まで届く長髪は派手に翻っていた。

「ようー！」

後ろから駆けてきた勢いのまま、肩をぱしんと叩かれて、少女はやはり大袈裟につんのめるふりをした。

「何すんのよ夏木なつき」

「安城あんじょうは楽勝らくしょうだろ？ 五十嵐いがいしさんも」

現れた少年は騙されずに笑った。

「元気だねー。うまくいったんだ、夏木は？」

「速水はやみはなんかへこんでたっばいけど。あ、ほら」

「あ、そうっばい。駿一しゅんいちー！」

指さした方向にあった見慣れた背中は、確かに幾分丸まっていた。そちらの少年が振り向いてこちらを認めるより早く、少女は軽やかに走り寄る。

「何だよ、志穂か」

「なあに、失敗した？」

「普通に言っなよ」

「高校も一緒になれるといーね」

「小中で飽き飽きしてるわ」

「その割には一緒のとこ受けたけど」

「おまえがレベル落とすからだろ。ってかレベル落としたとか言ってる人のチャレンジ校受けんなよ」

言い合っているうちに後の二人も追いついた。駅まで四人とも歩くつもりらしい。正門のそばの高校の名を冠したバス停から、その駅へ行くバスも出ているのだけれど。

五十嵐美寒は去年からの、夏木魁かいは一昨年の同級生であり、速水駿一は小学校も同じ幼馴染みである。全員受かればいいなと安城志穂は無邪気に考えた。受かるだろうと樂觀してもいた。生来前向きな性格で、努力は報われるものだとは自然に信じているところがあつ

たし、報われて然るべき努力を友人たちが重ねていることも疑わなかった。この高校を受けるのがこの面子であること自体、そもそも幸先がよいのだ。

「あ」

「どした？」

「美寒ちゃん、買い物あるんじゃないかった？」

「あ、うん。覚えてるよ。駅行く途中に、和菓子の美味しい店があるんだって」

「忘れるかと。馬鹿にすんなと」

「ごめん、ついくせで。ある人と付き合いが長いんでさ」

両手を頬に当てて志穂は言った。誰のことだ誰の、と駿一が歯を見せる。

「おまえじゃ安城には勝てないだろ」

「へえ、夏木は勝てるつもり」

「うわ、何だその自信」

騒がしい三人の一步後ろへ下がって、学校指定の紺のコートのポケットから、美寒は折り畳んだ紙切れを取り出した。母が描いてくれたと言っていたその店の地図だろうと、目の端にそれを捉えた志穂が思うともなく思ったとき、狙ったかのように風が吹いて、手袋の指先からそれを奪い取った。

反射的につかまえようとしたが、流石に無理があった。ちょうど左手に見えていた路地へ、あっという間に消えていくのを追って飛び込む。ブロック塀を越えるところは辛うじて見届けられた。

「入っちゃったよ」

「……ここ？」

一足遅れた美寒に指さして教えれば、途方に暮れたような、圧倒されたような一言が返ってきた。すご、と魁も一言呟いた。ちよつとした庭があるらしい間隔を置いて、塀の向こうにそびえている家には、壁の色がわからないほどにびっしりと葉をつけて、上から下まで蔭が絡みついていたのである。都会ではなくとも街中なのに、

幾分不似合いであるような。

志穂は駿一を見た。意図を察したらしく、俺かよ、と少年は顔をしかめた。

「いいじゃん。人住んでなさそうだし。いたとしても、怒られるのは慣れてるでしょ」

「言ってくれるな」

「あの、それなら自分で行くから。あ、それならってあれね、誰も住んでないならちょっとぐらい大丈夫かなってことね」

地図の持ち主は慌てて遮り、もう一度慌てて付け加えた。駿一が嫌がるから仕方ない、と聞こえたかもしれないと気にしたのだろう。本人以外の三人は、気にも留めていなかったけれども。

「あら、女の子に塀よじ登れなんて言わないわよねえ？」

「いや、あれ開くと思うけど」

少し先にある形ばかりの門を魁が指さす。あら、と志穂はまた言った。

表札は出ていなかった。かなり昔に取り払ったらしい形跡があった。郵便受けと呼び鈴は見るからに古びていて、この家に住人がいないであろうことを容易に確信させたが、門の前で美寒はしばし躊躇した。志穂自身は頭から平気だったけれど、蔦の葉が覆い隠す家を見上げれば、その理由も気持ちも理解できる。人にみつかったらと怖がる必要はないにしても　人でないものが、少し、怖くなるような。

一緒に行こ、と声をかけると友人はほっとした顔になった。所々塗料の剥げた格子の間に手を入れて、魁が門を外した。きいと軋んで開いた門を、成り行きと言おうか、結局四人ともが通り抜けた。

蔦の葉に負けない勢いで、庭には草が生い茂っている。目を睨りながらもずかずかと志穂は踏み込んでいった。がさがさと草を掻き分けて友人たちも後に続く。

紙切れはあっさりとみつかった。開けばやはり地図だった。

「あつたよ。はい」

「ありがとう。焦っちゃった」

「またどっか飛んでってなくてよかった」

「おわっ」

最後尾の駿一が悲鳴を上げた。草に隠れた穴か何かに片足を突っ込んだらしい。何やってんだよ、と魁が笑う。自力で抜け出せずじたばたしている様子に、気が楽になったのだろう美寒もくすつと笑んだ。

「いやっ、違えっつっ」

「何とさ」

からかうように言いながら、手を貸してやろうと近づいた、四歩目が五歩目。足を下ろした地面が、すつと溶けた。景色がかくんと傾いた。叫び声が重なった、後の二人の身にも同じことが起こったらしい。

咄嗟についた片手もまた、硬い手応えを一瞬だけ感じてから沈み始めた。引き抜こうとして重心が動けば、足のどちらかがますますもぐってしまう。地面がまるで猛暑の日向に置いたバターのような。往生するしかないことが嫌というほどわかった。

「庭……庭だろ！？　せめて家の中とかじゃないのかよ……！」

魁が混乱した声で喚いた。軽い気持ちで肝試しに廃墟へ行つたところ……という怪談は聞くけれど、閉ざされた空間でもない庭で、昼日中から起こるなど掟破りではないのだろうか？　そんなにも不用意なことはしていないはずではないか？

自由な方の手を振り回して、志穂は縋れる物を探した。一、二度草をつかまえたが、すぐさま根元から抜けてしまつて支えにならなかった。

「駿一！　門！　門つかんで！」

「届くか！」

怒鳴りながらも駿一は体をひねり、腕を伸ばした。その通り門までは到底届きそうになかったけれど、門から玄関へ続く敷石に、どうにか指先がかかったらしい。

「志穂！」

来い、と命じるように幼馴染みは呼んだ。志穂は必死に身を乗り出し 手首まで沈んだ方の手に、一気に体重をかけてしまう結果になった。

すぶつ、と底の抜けたような感覚があつて。

「志」

色と音が同時に消えた。

砂は仄かに熱を帯び、頬の片側と片耳をうずめ、顔の前に投げ出した手袋の手にも、膝下まであるコートにも、校則を守った白いハイソックスにもまみれている。寄せては返す波の響きが単調ながら安心を伴い、しばらくうつとりまぶたを閉じて浸っていたい風情ではあったが、幸か不幸か志穂の五感は聴覚以外も正常だった。

意識が戻った早々に志穂は手袋を外し、ナップサックを下ろして厚ぼつたいコートを脱ぎ捨て、靴を蹴り飛ばし靴下を取った。それでも暑い。コートの下のセーラー服も、当然冬物なのだから。

砂浜から波打ち際、波打ち際から水平線まで視線を滑らせる。余計なもの何一つない広々とした海だ。百八十度転じれば、陸の方はまるでジャングルであった。

「……夏はないでしょ」

頭を振って、志穂はぼやいた。正しくは夏であるためというより、熱帯であるための暑さなのだろうが。

意識がなくなる前のことを思い出してみる。廃屋の庭に四人して入り込み、メモを拾って引き揚げようとしたところで、地面がどうなった？

覚えていないのではない、どういうことなのかがわからない。足場も重力もない空間に落ち込んだところで記憶は途切れている。そして目覚めれば熱帯と思しき海岸だ。

「今さら驚かないけどさ。……驚いたけどさ」

あの家を前にした時点で、もっと警戒して然るべきだったのかもしれない。何しろ廃屋というやつは、不可思議な体験の舞台として王道だ。中学生は割合すんなりと、自らの置かれた状況を受け入れた。我が身に振りかかるかもしれないと思ったことはなくても、本や雑誌や銀幕やテレビの中で起こる分には、珍しくもない事態である。

……ただ。

立ち上がり、両手を口の横に立てる。

「駿一！ 美寒ちゃん！ 夏木い！」

友人たちの名を順に呼んでみる。そう、一緒にいたあの三人の姿がないのだ。

しばらく待ったが、反応はなかった。

ちよつと考えて靴下とスニーカーを履き直し、ナツプサックを背負う。コートばかりは着る気になれず腕にかけた。

ジャングルの中へ入って行ってしまえば、歩きづらそうだし迷うかもしれない。と行ってただ砂浜にいたのでは、暑さで倒れるかもわからない。ジャングルと砂浜の境目と言おうか、足許は砂だが頭上には木の枝が突き出している辺りを、右手に海を臨みながら志穂は歩き始めた。

時に三つの名を呼び、時に水平線に目を凝らす。砂浜は弧を描いており、カーブがいつまでも緩くならない。岩場が現れるわけでもない。どこまで行っても同じ調子でどこか現実感がなかった。熱に浮かされた夢の中にいるような気もした。実は夢、というよりも妄想だということはなかるうなど、嫌な考えが頭を掠めたとき、行く手に足跡が見えた。

胸が騒いだ。落ち着こうと歩調を一定に保ちながら近づいてみれば、浜から森へ伸びるのは、少々わかりづらいもののスニーカーの跡であった。宇宙人の痕跡でもあるかのように、少女の視線は釘づけになった。

「島……なんだ」

自分の足跡に違いなかった。一周してしまったのだ。

しかもどうやら無人島と思しい。この程度の時間で一周できる広さしかないのだ。声を張り上げながら歩いてきた間に、人がいるなら気づかれていますうなものである。 住人に限らず。

「……いや、それは流石に……」

呟いた。生来前向きで楽観的といっても、この状況だけならとも

かくこの状況で独りぼっちであることを、はいそうですかと受け止めるのは難しかった。

それとて珍しいことではない。受難の瞬間は一緒にいた仲間が散り散りになってしまうことは。珍しくは、ないけれど。

ぎゅっと目をつぶり、砂の上に膝を抱えた。暑さはもうどうでもよかった。後は家に帰るばかりだったのに。一年間お疲れ様、と母に笑顔で迎えられるばかりだったのに。……お母さん……。

今さら夢とも疑えない。認めるも認めないもない。地球のどこかであるにせよ異世界というやつにせよ、ここは自分のよく知る場所でも、よく知る場所と行き来しやすい範囲でもないのだ。自分以外は海に投げ出されて沈んでしまったのかもしれないという、最悪の可能性に思い至らなかつただけよかつたが、それは本人にはわからぬことである。

膝頭に額をつけ、瞼を閉ざした。かつてないほどに母が恋しかった。

涙が乾いた頃になって顔を上げると、遙かな空を白い鳥が飛んでいた。この島をめざしているらしい。しばらくぼんやりと眺めておかしい、と思った。まだ、着かないのだろうか？ もう随分大きく見えるのに……。

やがて志穂はナツプサックを揺らして森へ駆け込み、適当な木の幹に腕を回してしがみついた。たちまち強風が吹き荒れた。腕と木に挟まったコートがばたばた！ とはためく。自分の手首を必死につかんで、小柄な少女ははばたきに耐えた。鳥は恐ろしく巨大だったのだ。

風がやんでも動けなかった。羽繕いの気配がする。しばらく気もそぞろであったが、ふと気づくと静かになっていた。

おっかなびつくり浜へ出てみると、鳥の背だけが梢の上に覗いていた。丸くなって休んでいるらしい。

「異世界確定だわ……ありえないんだかありふれてるんだか」

軽い調子でと努めた声は裏返った。ここが地球上の孤島である可能性は消えた。あれほどの巨鳥が地球上の生物なら、流石に存在が認識されているだろう。

が、同時に 肝が据わった。そういう世界なのね。そういう事態なのね。わかりました。それならこっちもそのつもりでやるから。この手のファンタジーはあれやこれやの苦勞の末に、全員揃って帰還するのが常だ。それがセオリーだ。約束事だ。バラバラになっただけでみんな無事で、ちゃんと帰れることになってるはずよ。そうに決まってる。そういうものだもの。

勿論、現実と虚構の区別がついていないわけではない。虚構であったところで、そうした展開と結末になるとは限らないこともわかってる。一人二人が欠けることも、一人二人しか残らないことも、結局帰れない、帰らないこともあるだろう。

大事なのはそこではない。大丈夫だと、思うことだ。幸い、そのように思い込むのに、志穂は然程の自己暗示を必要としなかった。先ほどは心細さが勝ったけれど、何とかなるさと根拠なく思えるのが本来の志穂だった。

さて、では、どうしようか。友人たちがいないのであればこの島に用はない。となれば、まずは出ていくことだ。元の世界へ戻る道がここにあるとも思われない。あつたとしても、ここにしかないとは思われない。

島を出る。どうやって？

「フアンタジーならフアンタジーらしくやってみましょうか」

声は先よりは弾んでいた。

ナップサックを掻き回して常備のカッターをみつけた。どうして受検会場にまでそんな物を持っていくのだと、駿一がいれば突っ込んだらどうが　　と思いつかんでしまったのを振り払って、手近な蔓草をぐいとつかむと、カッターを使って木から引き剥がしにかかる。最初は音を立てまいと気を遣っていたけれど、巨鳥が反応しないので少しずつ大胆になった。

長い丈夫な蔓を何本か手に入れて近づいてみると、鳥の足の一部がお詔え向きに羽毛の下から突き出している。暑いのを我慢してコートを纏い、その上から蔓草を体に巻きつけて、反対端をそこに繋いだ。一ヶ所や二ヶ所に体重がかかるのは危ないだろうし、一本や二本で支えるのは心許なくて、繋ぎ合わせたり撚り合わせたりしながら、何本も何ヶ所にも結びつけた。千切れないように、外れないように、ほどけないように。けれど離れるときにはすぐ解けるように。鳥は蚊が触れたほどにも気にしていないようだった。

終われば後は待つばかり、腰を下ろして手袋をはめた。カッターはコートのポケット深くに収める。こんな方法で本当にいいのかと思わなくてもなかったけれど、占いのような気分でもあつた。王道の物語のように、努力をすれば報われるのか。工夫をすればうまくいくのか。仲間を想えば、救われるのか。これが成功するならば、

友人たちも帰り方もみつかる気がする。

背にも胸にも額にも汗を流しながら、ひたすら待つしかない時間はきつかった。今飛ぶか。今飛ぶか。もしも蔓が切れたらと、慣れない不安も時たまよぎる。ほどけないか、千切れないか。食い込みすぎないか。とんでもないところへ行つてしまわないか、地に着いたらうまく蔓を外せるか。速度はどれほど、風の強さは。鳥はいっかな動かない。

そのうち、いささか大胆なことに、心労からか少女はうとうとし始めた。受検前夜であった昨夜は、緊張でなかなか眠れなかったのだ。鈍くなってきた頭の中に、英語の並び替え問題を間違えたかもしれないという懸念がどういうわけか浮かんだ。

腹からぐいと持ち上げられて目が覚めた。サウナの中で英語の問題を出され、何度並べ替えても正しい文章にすることができない悪夢に苛まれているところだった。目の前を梢が通過し、さっと視界が開けた。のけぞりひっくり返って、頭が重心より下になった。たちまち見えた島全体の、中央は巨大な巣になっていた。

落ちる！

悲鳴と共に上体を起こして蔓にしがみつく。案の定蔓草が食い込んだ。息が詰まる。

足指と体とを繋ぐ蔓は、棒のようにぴんと張った。空気がごうごう音を立てて体がなびき、コートとスカートが狂ったようにはためく。目など開けておれない、遙かな海原も碌に見えず、あまりの高さに怯える余裕もなかった。涙がこぼれた。痛い。苦しい。

いつしか陸地の上空を飛んでいた。気づいた頃、鳥は急降下した。叩きつけられはしないか、踏み潰されはしないかと、恐れる暇もあらばこそ、何がどうなっているのか焦りと混乱でほとんどわからぬまま、志穂は砂利だらけの地面に投げ出された。頬に砂利が食い込んで、痛みにパニックが少し醒めた。

蔓草を外さなければ。

咄嗟に噛みついて歯を痛めた。用意のカッターが思い浮かび、忘れた自分に腹を立てながら、つかみ出してすばやく断ち切りにかかる。落としていなくてよかったと、冷や汗をかきつつ胸を撫で下ろすのは後回しだ。

ぐいと引つ張られ前のめりに数歩、再び蔓草がコート越しに食い込み、足先が地面から浮いたと思うや、ぶつり音を立てて蔓が切れた。また一瞬目が回り、また砂利の上に倒れ込んで、舞い上がる砂に目をつぶる。強い風に飛ばされこそしなかったが、ごろごろと数メートルは転がった。

静かになった。

荒い息を吐きながら、しばらく志穂は横たわっていた。蔓草を巻いた体のあちこちが痛む。砂利の中にまともに落ちたものだから、殊スカートもハイソックスも届かない膝の辺りを中心に、別種の痛みも染みてきた。すりむいているのかもしれない。

額を汗が横切り、落ちる。シャツに滲み込んだ汗の方は、遙かな空を飛ぶ間にすっかり冷えていた。

「いざ飛んだら、速かったなあ……」

呟いても反応がないことにも慣れてしまった。

コートを脱ぐには蔓草を取り去らなければならない。今度は落ちて着いてほどこうとようやく身を起こし、膝を払う。透明な粒が肌を離れて転げ落ちた。

え？

頭を上げて、見回した。ぱっと見たところは殺風景な谷間である。左右の勾配は急で、とてもよじ登れそうにない。その中に散らばりきらめいているのは、普通の砂利ではないようだった。手袋のまますくい上げた。

暑さを忘れた。

ダイヤモンドだった。

たっぷり二十秒もみつめていただろうか。手袋を外し、改めて左手にすくい上げ、右手の指で一つつまむ。

「……シンドバッド？」

志穂は呟いた。

幼い頃から読書好きで、特にお伽話や神話伝説はよく読んだ。児童向けのシリーズで完訳ではなかったが、アラビアンナイトも読破している。中でも有名なシンドバッドの航海譚、七つからなる冒険物語の中に、怪鳥の島と宝石の谷が登場する話があった。怪鳥ロックの棲む島に置き去りにされたシンドバッドは、ロックの足指にタバんでぶら下がって脱出し、ダイヤモンドの谷に降り立つのだ。

アラビアンナイトの世界に来ちゃった、とか？

ありうる気がした。何も自分がシンドバッドに変身しているわけではないから、物語に取り込まれているわけではない。が、物語をなぞるように物事が起こる世界なのだ、ということはあるかもしれない。その物語がアラビアンナイトに限られるかどうかはわからないが。

だとしたら、と崖の上を仰ぐ。シンドバッドと同じ方法で島から出てきたのだから、谷から出るにもシンドバッドと同じ方法を使った方がよいのだろうか。

「……どうやるんだっけ」

最後に読んだのは大分前なので詳細を覚えていない。というよりも、どのエピソードがどの話に属するのかわかえていない。

小首を傾げて記憶を探り、早々に諦めて肩を竦める。

「まあ、なるようになるでしょ」

物語をなぞるような世界なら、放っておいても物語と同じような展開になるだろう。物語にあつたようなシチュエーションに遭遇すれば、思い出せる自信はある。

何にせよ、動き出さないことには始まらない。蔓草を片手につかみ、転がっていたカッターを他方の手で取り上げた。とりあえず、コートを脱ごう。

どさり、と赤い塊が行く手に落ちた。解いた蔓草を引きずったり時折振り回したりしながら、ダイヤモンドを踏んだり蹴散らしたりして進んでいた志穂は、叱られたように反射的に足を止め、次の瞬間には顔を輝かせた。ただ落ちたのではない、誰かが投げ落としたようだったのだ。人がいる。上に人が来ている。

駆け寄って、まずは上を向いた。

「あの！ 誰か、いるんですか？」

掌を口の両脇に立て、声を張り上げる。けれども崖が高すぎるせいか、投げ込むとすぐ離れていつてしまったのか、上で誰かが聞きつけてくれた様子はなかった。

幾度か試みてから頬を膨らませ、足許に視線を移す。一抱えはありそうな赤い塊。最初は何やらわからなかったが、シンドバッドに出てきただろうかと考えた途端に閃いた。目を剥く。生肉なのだ。

ダイヤモンドを採取するのに、人々は自らは谷へ下りない。それらしい姿は見かけていないけれど、物語の中では確か、大蛇が棲んでいるためだった。その代わりが、これだ。そしてこれを利用して、シンドバッドは脱出した。

……これを？

志穂は一、二歩後ずさりした。見慣れた物ではないから気がつかなかったが、実を言えばどこか作り物めいて生々しくなかった。血が滴っているわけでもなく、臭いも弱い。それでも中学生の少女にとっては、十分に気味の悪い代物である。これを……。

迷う時間があると思えばいつまでも迷っていただろう。

「あーっ、もういい！ 他に思えないものっ」

投げやりに叫ぶと膝をつき、ダイヤモンドを掻き集めた。ナツプサツクに、制服のポケットに、コートを広げてそのポケットに、満たす。直接触れるのを少し躊躇したが、思い切って肉塊にも擦り込

む。持っていていけるだけ持っていた方がよい。

そして　えいつ、と気合を入れてその肉塊を取り上げ、蔓草で体にくくりつけた。尤も直接セーラー服に触れさせたくなかったの
で、コートを犠牲にすることにして間に挟んだ上でだが。

「これで上手くいかなかったら最悪なんだけど！」

喚いて、仰向けに寝転がる。のしかかる重みや冷たさや、何より
感触が不快だった。コート越しといっても五十歩百歩である。

ありがたいことには幾らも待たないうちに、一羽の鷲が舞い下り
てきた。近づく影は随分と小さく見え、あれで大丈夫かと最初は案
じられたが、やがてその爪が肉をつかむと、一秒の後には少女は宙
に浮いた。少々重いのかあつという間ではなかったが、然程間を置
かず崖の上へ出た。

わあつと叫び声がして、木の棒を打ち合わせる音と共に、人々の
走ってくる気配がした。石が飛んできて二つばかり当たった。鷲は
狼狽えて肉を放した。

「うあつ」

落下は当然覚悟していたが、それで即ち華麗な着地を決められる
ということにはならない。足をつくなりバランスを崩して横倒しに
なった弾み、ポケットの中の石が足に食い込んで志穂は悲鳴を上げ
た。が、ゆっくり痛がっている余裕はない。すぐさま起き上がって
蔓草をほどき、生肉とコートを放り出して、ようやくほうつと息を
吐いた。二度とごめんだ、こんなの。

でも、狙い通りにはなった。またあの話の通りに行った。
…これは、もう。

気配に顔を上げれば木の棒や石を手に、鷲を追い払ったのだろう
三十人ばかりの男女が、戸惑った様子で近づいてきていた。鷲から
取り返した肉についてくるのは落とした勢いで食い込んだダイヤモンド
ドであった、見慣れぬ少女などでは勿論なかったはずなのだ。

男性はターバンを巻いておらず、女性もベールをつけていないか
ら、アラビアンナイトそのままの世界ではやはりないらしい。が、

袖口が広く裾も大きく、ゆったりした印象の衣服はアラビアンナイトを連想させる。背丈や体格は日本人と大差ないか、やや低いように思えた。髪は黒から濃い茶色までいるようで、肌の色は志穂よりは濃い。

戸惑いが警戒に変わる前に、立ち上がってにこっとしてみせる。

「こんにちは！ あたしの言葉、わかります？」

「……ああ。流暢だな」

どう見ても異国の人間なのに、と正面にいた女が答えた。これもよくあることだ。異国にはある言葉の壁が、異世界に存在しないこと。

「そこに 下にいたのかい」

「はい、鳥に運ばれてきたんです。どうやって上がるのかなーと思っただけです」

「すごいやり方を選んだものだな」

呆れたように女が言った。その前に、と隣りに立つ男が口を挟む。

「よく食われなかったな。鳥にも、蛇にも」

「……蛇いるんですか？」

「あの鳥が時々餌にしに来るよ」

うあ、やつぱ本当はいたのか。

危なかったんだ、と呟けば、暢気な子だ、と男は笑った。少女はちろつと舌を出した。くすくす笑いと苦笑いが広がって、尤も中には呆れ返った渋い顔も交ざっていたが、ともあれ、場の緊張は解けたようだった。

「ダイヤを採ろうとしてたんですよね？」

「ああ」

肉塊を指さして問えば短い肯定が返った。じゃあ、とナツプサクを下ろして前に持ってくる。さっと開いた。

「お土産になります？」

口まで詰めたきらめく粒を見せれば、おお、とざわめきが起こった。投げ込んだ肉に食い込む量、あの方法で一度に手に入れられる

量を、遙かに上回っているはずだ。

少々得意な気分になったものの、期待したほどの歓声が上がったわけでもなかった。拍子抜けして、それからとはたと思いつく。

「一度に採っていい量が決まってるのかだったら、オーバーしてる分は捨てますけど」

「いや、知らずに採った物まで捨てることはないさ」

男は手を振ったが、それは即ちそうした制限が存在することを意味した。オリジナルの物語にはなかったけれど、何から何まで完全に一致するわけでもないようだったから、ひよつとしたらと思っただの。例えば鳥の指に下がるにも、ターバンでなく蔓草を使った。

「あの鳥に運ばれてきたっていうなら、あんたは相当遠くにいたんだろう。だったら路銀は多い方がいい。宝谷の神もお許しくださるさ」

引き取って続けた女は片目をつぶった。仕来り、習慣には反するが、見逃してくれるということらしい。周りの者たちも不服そうな様子は見せなかった。土産という言葉をさりげなく無視して、全て自分で使うとよいと言われたことも悟った。

この会話はオリジナルにはないはずだ。だから、ここは物語の再現ではない。シンドバッドが親切にされたから、自分も親切にされるわけではない。純粹に、この人々の。

ほら、大丈夫だ。ハッピーエンドの物語をなぞってるからってだけじゃない。ハッピーエンドがセオリーだからっていうだけでもない。まず最初に会えたのが、こういう人たちだから。きっと

この先も、何もかも、うまくいく。

とはいえ独り占めは気が引けて、ナップサックを持ち上げて示し、「お近づきのしるしに皆さんもどうぞ、っていうのはありますか？」瞬きを一つして女は吹き出した。

「折角の好意を無にするのも悪いね！　そこまで言うなら、ありがたく貰うよ」

ありがたく自分一人のものにしておけばよいのと思ったのだろ

うけれど、勿論それはお互い様である。満足して、少女は笑んだ。
駿一、美寒ちゃん、夏木。こっちの滑り出しは順調よ。そっちは、
どう？

五歩も離れた先の景色は霧に隠れて見えない。さらに五歩も離れたところが不意に崖になっただけで、おかしくなさそうだ。自分の足音や息遣いの他には、鳥のはばたきや木々のざわめきさえ聞こえない。急に野獣が飛び出して来るかもしれないという不安だけはない。飛び出す前に絶対気配でわかる。

死んだのかな、俺。

いやいやいや、と魁は首を振る。大体あれが死ぬようなことだったのかもわからない。ただ、気がついたら一人きりで霧深い山道を歩いていったというのが、それらしいシチュエーションに思えたただだ。

そのまま歩き続けなければいけないということもなかるうが、わざわざ引き返す理由もないし、恐らく意味もない。となれば道なりに進むことになる。先が文字通り見えないのだから、試しに道を外れてみるのは少々勇気がいった。

一緒にいたあの三人はどうしたのだろう。すっとんと落下するよう姿を消した志穂。それを追うように身を乗り出して地に吞まれた駿一。美寒も同じように、声もなく吸い込まれたのだろうか。どれほどの時間か無意識に歩き続けた後で、慌てて捜し始めても無駄だろうけれど。

と 気配を感じて足を止める。前方から誰かが近づいてくるのだ。霧などものともせずにはかすかと。影が見え、濃くなり、と思うや無造作に一人の青年が現れた。

単色をした詰め襟の衣服と束ねた髪は中国風に見えた。顔立ちも中国風であるような日本風であるような、そのどちらとも言い切れぬような、少なくとも東洋風であることは確かだ。人がよさそうとは言えないが害はなさそうに映った。身構えていた魁は拍子抜けした。何とも 何というか 普通だ。

「うお、本当にいた」

青年は目を円くした。

「なんだってこんなとこにいるんだ、おまえ」

「……えーと」

自分こそ知りたいことであつたが、そのためばかりでなく困惑した。起こつたことを告げたところで通じるものかどうか。

「……道に迷つたつていうか？」

「どこをどう迷えばここに出るんだよ」

考えるのを放棄して適当なことを言つと青年は突っ込みを入れた。

「まあいいさ、ついてきな。先生が呼びだ」

「先生？」

「おう。実アな、俺は仙人の弟子なんだ。聞いて驚け」

「いや、『聞いて驚け』の場所おかしいし」

胸を張る青年に今度は魁が突っ込む。後で言つてどうするのだ。

「つてか、仙人？」

「なんだ、信じてねえのか？」

「仙人の弟子だつつて威張るのはなんか違うくないかと」

「……生意気なやつだな」

不満そうに睨んできた、その様子も仙人のイメージからは程遠い。寧ろ俗っぽい雰囲気があつた。新宿か渋谷でもうるついでいそうだとはいえ、似つかわしくないその口から仙人という言葉が出るとそれは却つて信憑性を感じさせた。ここは死後の世界だろうかと僅かの間でも本気で思つた身としては、ありえないと一笑に付すわけにもいかない。そもそもここにいること自体、あの奇妙な出来事のためなのだろうし。

何にせよ、つっぱねてこのまま一人でいたところで仕方ないわけで、少年は青年に従うことにした。

「術とか使えんの？」

そう訊いたのは疑つたためでもからかつたのでもなく、純粹に興味からだつた。自慢気に答えるかと思いきや青年は肩を落とす。

「それがちつとも教えてもらえんのよ」

「じゃ、修行ってどんなことすんの」

「それもなあ。毎日水汲んだり薪切ったり山菜採ったりばっかでさ」

「……へー」

「疑ってんなおまえ？」

疑ったというよりも、その割に威張ってみせたよなと呆れたのである。

「で、わかってないんだけど、ここ、何」

「何って、見たままさ。霧の山だ。霊山の手前の」

「いや、俺ここの地理知らないんだ」

「お、そうか。あいな」

霧深い山を越えたところに仙人の住まう霊山がある。認められた者だけが霧の閉ざす道を抜け、仙人の許に到達することができる。

そうした言い伝えが古くからあるのだと青年は説明した。つまり自分は選ばれたのだと言ったときは得意気だった。

そのときちょうど霧が晴れ、視界が開けた。魁は瞬きをして軽く息を吐いた。花を咲かせているでもない木々は地味であったし、鳥や獣の気配も相変わらず感じられなかったけれど、輪郭と色がわかるようになっただけで、随分と心強かった。

「おまえも選ばれたってことなんかな、これは」

何事もなくついてきた少年を見下ろして青年は小首を傾げた。

「あんたが案内してくれたからじゃないの」

「いいこと言うな」

気に入ったとばかり笑って再び前を向く。別に機嫌を取ったわけではなかったが、取ろうと思えば簡単な相手らしいなと、肩を竦めて魁は後に続いた。

第3章 仙人の弟子の語(こと) 2

塀も囲いもなくぼつねんと鎮座している庵の、すぐそばにある泉のほとりに老人は腰かけていた。青年の師であろうと察しがついた。白くて長い髪と髭は注文通りというところで、仙人のイメージに合致している。静かに水面を眺めていて、若者たちが近づいていっても動かなかった。

「先生、連れてきました」

弟子の言葉にゆつくりと目を向ける。向けた先は魁であつて弟子ではなかった。ひたと視線を据えられて、疚しいこともないのに少年はたじろいだ。

「……巡り合わせよの」

第一声は独り言と思しかった。

「そなたは菜摘みに戻るがよい」

「え」

弟子は不満そうな声を上げたが、相手にされずにすごすごと引き返していった。魁は幾分の同情を覚えて見送る。何この用済み感。

「案ずるでない。彼方の世から此方の世へ落ち込む者は稀にある。名乗りも名乗らせもせず老人は言った。やはりここは異世界であるらしい。疑いは微塵も生じなかった。そうだろうと元から思っていたためではなく。」

「帰れるつてことですか？」

「おのが世を手放さずにおればな」

一方通行では意味がないと確かめれば、答えは淡々と返ってきた。特に微笑みかけもしない。

「聞くがよい、彼方の子。ここはそなたには夢幻の世ぞ」

「夢幻……」

何の迷いもなく『夢幻』と受け取った。『無限』の方は思い浮かびもしなかった。

「唯一無二のまことの世、ただ一つの真の世界を誰もが持つ。数多き世は儚き夢、仮初の幻にすぎぬ」

一度言葉を切ったのは、話についてきているか、様子を見るためだったかもしれない。

夢幻の世といっても、ここが夢の世界であって、現実の自分は眠りに落ちているというわけではないようだ。この世界と自分たちの世界の他にも、どうやら幾つもの世界があるようで、けれども真の世界はただ一つであって、が、そうなるか……？

困惑を察したのだろう。言い聞かせるような口調になる。

「彼方を我が世と定める限り、彼方の人間であるということじゃ。此方を我が世と定めれば、彼方の世は醒めれば消える影となる」

夢の幻の、今度は影と来た。醒めれば消える。

「こつちの世界もいいなと思ったら帰れなくなるってこと？」

「『帰る』と言うつちはそうはならぬ」

「……ふうん」

主観的な話であるらしい。真の世界というのは要するに自分の世界なのだろう。人によって異なるような言い方をしたのは、実際人によって異なるため。それ以外を夢の世と称するのは、同じ夢を見ようとして見ることができないように、自由に往來すること、あるいは認識することができないため、という辺りだろうか。

尤も、数多くあるという世界の性質や関係性を知りたいわけではない。そちらを考えるのはやめにして、少年は老人を改めてみつめた。

「それで、帰るにはどうすればいいんですか？」

「わかんないって?」

「わかんないってわけじゃないと思うけど」

「いやあ、本当はわかってないんじゃないかと思うね、俺は」

自分自身の師匠に対して随分なことを弟子は言った。

時が来ればなど言うばかりで帰り方を教えてはくれなかったけれども、理屈ではない説得力を感じて、魁は勇気づけられていた。いずれ帰れるだろうということだけでなく、そのときにはあの三人と合流できているだろうとも老人は仄めかしたのだ。あるいは逆に、三人と合流することで帰還の扉が開くのもかもしれない。その代わりといおうかこの近辺にいるわけではないようだったけれど、それでも喜ばしい予言で、水を差すようなことを言われるのは嬉しくなかった。それで再び不安が襲ってくるようなことはなかったが。

「おまえはわかってんの」

「何を」

「この世とかあの世とかいう話さ」

「あの世つつつと話変わってくるじゃん」

人を死人みたいに言うなよ。

「まあ、大体。こっちの世界に取り込まれたらまずいつてことだろ」

「取り込まれるって?」

「だから……こっちの人間になること」

「って、どういうことだ?」

「……とにかく、ここの人間じゃないってことを忘れなきゃいいんだよ」

わかってないんじゃないか、と青年は大袈裟に呆れたポーズを取った。実を言えばその通りなのかもしれない。何となくわかったよな気分になっただけはいるものの、具体的に何がどうなるとまづいのかは見当がつかないのだから。むう、と異界の少年はうなった。

青年が本気にしていないのは、異世界という概念が呑み込めていないためもあるのだろう。ここだって仙境なのだから似たようなものだろうと言われると、それは違うと思いつつもどう説明すればよいかわからなかった。相手は深く気にしてはおらず、遠いよそから来たとだけ理解すれば十分であるようだったが。

「で、しばらくここにいんの」
「ん」

それは仙人が口にした中で、数少ないはっきりと意味のわかる言葉だった。慣れるまではここにいろがよい、と。

「そいつぁいいや。普通に話せるやつがいなくて結構退屈してんのよ」

青年はにこにことした。大して広いわけでもない寢室に二人目が転がり込んだことは、不快には当たらないらしかった。

「よし、これからは俺を兄さんと呼べ」

「別に弟子入りしたんじゃないぞ、俺は」

「ここにいろからは似たようなもんだろうが。あとあれだ、敬語使え敬語」

「はあ？」

「……追い出すぞてめえ」

わくわくしたような口調から一転、じとつとした目で睨まれて魁は笑った。言うこともキャラも違うけど、なんか、速水と話してるみたいだ。

あの三人がどうなったかも気懸りではあったが、いずれ会えるということは無事ではいろのだろう。唐突に訪れた異世界での最初の夜を、少年は安らかな気分で迎えた。

弟弟子になつたわけではないが、魁は青年を手伝いながら過ごした。薪を樵り、菜を摘み、水を汲み、食事を作つて片づけて、下手をするとそれで日が暮れてしまう。ただ山で暮らしているだけではないかと、青年がこぼすのもわからないではない。

修学旅行で飯盒炊爨ぐらゐは経験したものの、斧を使って自力で薪を取つてきたわけではなかったし、自分たちで山菜を探して集めてきたわけでもなかった。初めて行うことばかりであつた割に、慣れるのは思ひの外早かつた。

斧を振り上げるのも振り下ろすのも、十日も経つ頃には危なげなく様になつていて、幹に打ち込めばカーンと気味のよい音が響いた。薪に向く木を見分けられるようにもなつたし、切つて束ねて運ぶ手際もよくなつた。山菜採りにしても水汲みにしても、山で暮らして長いかのように手慣れてきている。夢幻つてこういうことかなと思つた。呑み込みが現実とは思えぬほどに早い。上達の過程を細かく追わず、『覚えた』『学んだ』『身につけた』といった一言で済ませる物語のように。

ここへ来てからどれほどの時間が経つたのかも実は曖昧である。同じような日々の繰り返し。昨日と同じような今日、今日と同じような明日。そんなフレーズは耳新しくもないが、日本で思い浮かべるのはおこがましいと感じるほど、ここでの日々は徹底的に変わらなかつた。曜日によつて時間割が異なるわけでも季節の行事があるわけでもないし、新しいドラマが始まることもバラエティが二時間スペシャルになることもないのだ。天気さえ変わらないのは仙境ゆえだろうか。

そんな中で変化があるとすれば青年との会話だつた。それとて話題が多岐に渡るわけではなかつたが。

「そりゃ、弟子は取らないつて言うのをそこを何とかつて頼み込ん

だんだんだけよ。引き受けたんなら師匠らしくしてくれてよくねえ」

この手の愚痴をこぼす頻度は高かった。

庵の主である老人とは、最初のとき以来、話らしい話をしていなかった。部屋の中にいれば覗く用もないから何をしているかわからないし、ふらつとどこかへ出かけてしまえばまして知りようもない泉のほとりの岩に座り、水面を眺めているのは何度か見かけた。弟子も客人も存在しないかのような調子だったから、弟子が文句をつけたくなるのも無理はないかもしれないかった。

仙人であるということは疑わなかった。仙人は生活の中で、当たり前前に仙術を用いた。呪文を唱えるでも気合を入れるでもなく、まるでそこに何もなかったように壁を通り抜けては、靴でも履くかのように雲を踏んで飛んでいく。初めて遭遇したときはぼかんとしてしばらく立ち尽くしてしまっただが、今はもう馴染みの光景である。

「俺は下男になりに来たんじゃないんだぞ」

「兄さんはなんで仙人になろうと思ったわけ」

魁は訊いてみた。兄弟弟子ではないけれど、兄さんという呼び方は何だか気に入って使っている。

「仙人は霞を食べるだろ」

「ぼんと答えが来た。」

「……は？」

「働かなくていい」

解説のように付け加える。聞き間違いでは、どうやらないようだ。霞を食べているためかどうかは知らないけれど、確かに老人は食事にほとんど手をつけない。せいぜい木の実を幾つかである。一日かけて薪や山菜や水を集めて、作った料理は大部分が自分たちの口に入るのだった。下男のようだという不満は、それを思えば当たらない。

「そのくせ何千年も生きられるんだぜ。こんな上手い話はないぞ」

「……マジで？」

「おう、仙人つてのはそういうもんだ」

そこじゃなくて。

額を押さえる。それで修行になるのだろうか。いや、恐らく、だから修行は始まっていないのだ。修行に臨むに相応しい心構えができるまで。出直せと言わずにここに置いてやった老人は、実はとても親切だったのではなからうか。

「どうした？」

「いや、何でも……」

自分が説教してやらねばならないこともないだろうし、そもそもそんな気にもなれなくて、放っておいてくれというように魁は片手を振った。とりあえず、認められた人間しかここに来れないってのは迷信だな。多分。

「おい。ナツキカイ」

神妙な調子で声をかけられて、木の実を拾う手を止めた。仙境に導かれて約一ヶ月、という感覚に信用は置けなかったが、とにかく自分ではそれぐらい経ったように感じていた頃のことだった。

「俺は街に帰ろうと思う」

「え？」

「普通に暮らすんなら街がいいわ」

「……そう」

それがいいんじゃないかなと思った。この青年ではいつまで経っても修行には入れない気がする。

「おまえも来るか？」

「俺も？」

「先生に訊きたいことは、山ほどあるんだろうけどよ。いつになったら教われるかわかったもんじゃないぞ」

霧の山を越えてきてまで弟子入りした相手だろうに。

とはいえ、青年なりに気にかけてくれているらしいことはわかって、ありがと、と魁は応じた。

「でも、俺はいいよ。別の世界のことを知ってる人なんて、そうそうみつかるとは思えないし」

異界の人間であることを告げずとも見抜いた仙人は、間違いなく知っているはずだ。そっか、と呟いた青年は残念そうだった。

「やはりか。よからう」

街へ戻りたいという弟子の言葉に、老人は驚きも怒りもしなかった。以前であれば冷たいと感じたかもしれないが、弟子入りの動機を聞いてしまった今となつては、『やはり』と言いたくもなるだろうと思う。

「で……あの。先生」

思い切ったように弟子は続けた。

「その前にせめて一つぐらい、術を教えてくださいませんか」

「何を知りたい」

あっさりとした承したのは意外だった。青年も流石に戸惑ったようだったが、撤回されては困るとばかり急いだ。

「じゃああの、先生がよく使われる、壁を通り抜ける術を」

仙人は壁を指さして、口の中で呪文らしきものを唱えた。行け、と促されて青年は恐る恐る近づき、手を伸ばした。

「うお！」

魁のいる場所からは見えなかったが、指先が壁に刺さつたらしい。驚きと興奮の声を上げるや、駆け出して壁の向こうに消えた。再び歓声が聞こえ、駆け戻ってきた青年は頬を上気させていた。

「すげえや！」

「……できるんだ」

魁は呟いた。てつきり不可能だと思っていたのに。

「この地の気を吸い、水を飲み、菜を食べ実を食べてきた体なればの」

そういえば仙人自身は呪文を用いない。きちんと修行を積んでいれば、呪文は必要ないのだろう。けれどもその呪文が効くのはここで過ごしていたからであって、つまりここでの日々は無駄ではなかったのだ。

「壁抜けの呪は教えてやろう。じゃが、邪まなる思いを抱けば術は永久とこしえに消える。忘れるでないぞ」

はい、はい、と半ば上の空で青年は繰り返した。本当に大丈夫かなど幾分危ぶまれたけれど、その姿は年上ながら微笑ましくて、よかったじゃん、と少年は祝した。

安城や速水はどうしてるかな。

一人になつて心細くなつたのか、友人たちを思い浮かべることが増えた。四人とも散り散りになつたのだろうか、誰かと誰かは一緒にいるのだろうか。自分のように誰かに助けてもらえたらどうか。いずれ帰れるはずだということは知っているのだろうか。

その言動に呆れさせられたものだけれど、賑やかな話し相手がいなくなつたことは寂しかった。自分がここへ来るまでの、師を除けば一人きりでいた間はどんな気分だったのだろうと、カーン、カーンと斧の音を響かせながら魁は考えた。自分を思いの外気に入っていたらしいのも、そんなところへ現れたためだったかもしれない。

薪を背に戻ってきた後で泉へ足を向けたのは、誰かと口を利きたくなつたためかもしれない。果たしてそこでは仙人が水面を眺めていた。尤も何と話しかければよいものか迷つただけけれど、

「見るか」

泉から目を離さぬままながら、仙人の方が珍しく声をかけた。

「あれが街に着いたところじゃ」

「兄さんですか？」

岩の隣りに立つて覗き込む。泉の水は不思議に濁つて神秘的なイメージを醸し出すこともなく、水底の小石を数えられるほどそつてなく澄み切っていた。が、一つ瞬きをすると水鏡に空が映り、あれつともう一つ瞬きをするとどこかの街の景色が映つた。

塀の前に人が集まっていて、半円の中央にあの青年がいた。塀を指さしながら得意気に何やら説明している。それから勿体をつけて向き直り、ごによごによと口を動かして、頭から飛び込み 激突した。

「わ」

魁は肩を竦めた。青年は瘤を作ってひっくり返った。何人が慌てて飛び出して介抱し始める。

「……呪文間違えたとか？」

壁を抜ける術を披露しようとして、失敗したのは明らかだった。何やってんだよ。

「邪念を抱いたということじゃ。悪事を働けるとでも思ったのじゃろう」

師匠は容赦なく言った。

悪事。何かあったときに盗みに入りやすいとか、そういったことだろうか。尤もそのつもりなら、壁抜けの術は隠しておいた方が賢いだろうけれども。

「……あんな嬉しそうだったのに」

魁は呟いた。見物人の幾らかは唾然とし、幾らかは呆れているようだったが、多くは笑い出している。真面目に修行を積んで身につけたわけでもなかったし、無にしたのも青年自身であるのだけれど、こうなるとどうも気の毒だった。できると思いついただけで、やろうとは考えなかったかもしれないのに。それともその発想自体が、仙人にはあつてはいけないことなのだろうか。

「仙境に何年身を置いたところで同じことであつたらうよ。あれは俗世の人間じゃ」

呆れているのか怒っているのか悲しんでいるのか、それとも嗤っているのか。多分、どれでもないのだろう。ただ事実を事実として述べているように感じた。仙人の器ではない俗人が自分の世界に戻つたと、単にそれだけのことなのかもしれない。

だとしたら、今のうちに見切りをつけて、やはり正解だったのだろうか。何年もを無駄にすることなく、傷の浅いうちに帰っていい。自分の本来いるべき場所に、間に合ううちに帰ることができて

「そなたも行くがよい。時が来た」

「えっ？」

物思いに沈みかけていた少年は、一拍置いて目を見開いた。俺の

話？

「霧の山を抜け、北東へ一月向かえ。友の一人とまみえることになるう。」

「ど、どこですかそれ？」

「それを知るのは、此方の人間に近づくことぞ。」

反射的に問えばそんな答えが来た。はっとして向き直る。この世界に取り込まれるという、わかるようでわかっていない事態の具体例。

「夢の世は曖昧なもの。此方の世に吞まれたくなくば、此方のものを特定してはならぬ。」

昔話の時代が『昔々』であり、舞台が『あるところ』であるように。やはり物語の世界だと、志穂が聞けば言っただろうか。

「でも、じゃあ北東に一ヶ月って。」

「その足で歩もうとも馬に乗ろうとも必ず一月じゃ。」

……特定はしてないってことか。

友人の居場所をみつけたのではなくて、占いのようなものであるらしい。ラッキー方位は北東です、昔の友人と再会するでしょう。

「そなたの歩み方を覚えよ。」

老人は厳かに言った。

「そなたには三つの呪を教えてやろう。苦しい道になるやもしれぬが、おのが世を忘れるでないぞ。いずれ扉の開くときが来ようゆえ。」

少年が旅立ったのは翌日のことだった。苦難が訪れるやもしれぬという予言が影を落としているものの、最後には四人揃つての帰還が待っていることを信じ、兄弟子の轍を踏むまいという教訓も頭の隅に置いて。

勿論、知るべくもなかったのだ。訪れるであろう苦難の質も、一月後に早くもその一つ目が振りかかるだろうことも、それをもたらすのが他ならぬ、そこで再会する友人であるという ことも。

第4章 梨売りを懲らす語(こと) 1

見えてきた、と男は行く手を指し示した。

「あれだろう、シユリの村つてのは」

「シユリ、か。遠くへ来たって感じがするね」

女の言う意味は志穂にも通じた。宝谷の上の村を始め、これまでに立ち寄った村や町の名は、どれももっと長かったのだ。片仮名三文字の二音節で済む地名は、いかにも異文化のものなのである。

「やった、これ下ろせる」

「最初は平気な顔してたのにねえ」

背中 of 荷物を指して大袈裟に喜べば女は笑った。

食糧や寝袋や着替えといった旅に必要な品々と路銀代わりのダイヤモンドの他に、捨てていく気にならなかった学校用のナツプサックや、きっちり洗ったコートも背負い袋には入っている。こちらで調達したこちらの衣服を基本的に着ることにしたから、セーラー服もそちらの仲間だ。持ち帰る目的で持ち歩くだけのそれらを含めて荷物は登山者のリュックほどの大きさになっていた。重さはナツプサックの一番重いととき、即ち教科書が一番多くて分厚いとときと同程度に最初は感じた。最近はまだ少し重いような気がする。

荷物の量と大きさと重さには実を言えば矛盾があつて、この量がこの大きさに収まっているのは奇妙なことだつたし、志穂の肩にかかる重さはあるべきよりも軽かつた。けれども現にそうになっているから、少女は気に留めず、気づかなかつた。夢幻の世の話聞いた魁なら、悟ることもあつただろうが。

友人たちを捜すべく、ダイヤモンドを売りに行く者たちと共に宝谷を離れてから、もう二ヶ月ほど志穂は旅路にあつた。この地域のあちこちから人や物が集まるといふ、ちよつとした市場のある町へ、年に二回は遠征するのが習慣なのだという。少女はその市場を積極的に見て回り、店を覗き人に話しかけては、友人たちの噂が聞けな

いかと試みた。残念ながら収穫はなく、同行者たちも商売を終えて引き返していったのだけれど、崖の上で最初に言葉を交わした二人は、急に一人旅になるのも大変だと今も付き合ってくれていた。

「シュリの村に変わった話はあるかい、ヒタキ？」

「いや、特に聞いていないな」

女が問うと男は首を振り、前に立ち寄った村とそう違いはないのだろうと答えた。市場のある町まではともかく、そこから先は二人にとっても馴染みある場所ではないのだということを、少女はちゃんと理解していた。

宿を取ったらとりあえず、宿の人間に友人たちを知らないか訊いてみる。名前を挙げて聞いたことがないかと問い、特徴を告げて見たことがないかと問う。残念ながら今のところ、否でない返答を貰ったことはないが。

なのでその後は出て行って、手懸かりはないかと村を駆け回るのが常だ。やはり芳しい成果は出ないのだけれど、物を見るのも人と喋るのも単純に楽しい志穂は特にめげない。こちらの世界も広いのだ、友人たちが近くにいるとは限らないことぐらい承知である。

「よそから来た物売りの集まる広場があるらしいよ」
いつも通り外へ行こうとする志穂に女が声をかけた。

よそから来ているということは、よそから遙々ここへ来るまでに友人たちの誰かを見かけているかもしれないということだ。この村から出たことのない者より可能性は高い。

「ありがと、コルリさん。行ってみる」

「わたしも行こう。何が見られるかわからないからな」

結局三人連れ立って向かった。二人あるいはその片方が、聞き込みを手伝うことも時々ある。毎回ではないから、付き合おうと言ったということは気が向いたということだ。

広場はそこそこ賑わっていた。よその人間が一時の店を開くのに、この場所に限っては許可がいらならしい。敷物の上に商品を並べたり、簡易の屋台を組んだり、荷車をそのまま停めたりして、十数組が即席の売り場を作っている。敷物の多い一画はフリーマーケットに似ているが、屋台が固まっている辺りは縁日めいていた。

手分けしようと相談しなくても、こういうときはヒタキとコルリは別々の方向へ歩いていき、志穂も勿論二人とは違う店から覗き始める。今日に限って入り口のすぐそばで揃って足を止めたのは、そこに人だかりができていて、かつ、やり取りが漏れ聞こえたからだ

った。

「十五ドウはないよ」

「俺の梨に俺が値をつけて何が悪い」

「そんな値じゃそうそう買えんよ。ちつとぐらい負けてくれ」

「負けるぐらいなら最初から売りに来るか」

随分上から目線じゃないの。

人の間からひよいと覗くと、梨を山のように積んだ荷車が一台停まっていた。売り手と思しき男がその前で不機嫌な顔をしており、客から何か言われるたびに一々喧嘩腰で返している。客商売なのにそれでよいのだろうか。

十五ドウって高いの？ と問えば、普通果物は八ドウから十ドウが相場だね、とコルリは答えた。なるほど、それはなかなか高い。

それで売れないのでは本末転倒だろうと思えば、

「嫌なら買わんでいい」

「この季節に梨がないっていうのは寂しいんだよ」

そんな応酬がちょうど聞こえた。何のかんの言っても結局は売れるという算段があるわけだ。確かに、少なくともここに集まっている人々は、高額に躊躇ってはいるものの、見切りをつけて立ち去ってもいない。じゃあいいや、で諦めるには惜しいのだろう。クリスマスにはクリスマスケーキが、バレンタインデーにはチョコプレートが、欠かせないようなものだろうか。文句をつけるのでなく説得しようとしている辺り、この村の人々の気質が表れている。

……梨、ね。

思いついたことがあって小首を傾げたとき、不意に誰かが人垣を分けて、輪の中へと進み出た。ごく自然に向けた目を、志穂は瞠つた。

二十歳前後というところだろうか。髪は黒く、背は高い。いや、周りが低めだから高く映るのだ。衣服はどことなく宗教的な風味があつて、僧侶や神職、あるいは牧師のそれを思わせたが、古びて所々擦り切れている。肩ほどまである杖に半ば縋るようにしながら、

梨売りと向き合う位置に立つ。低く起こったざわめきの中に、修行僧という単語が幾つか聞こえた。

日本人みたい。

髪の色も、肌の色も。顔立ちも。佇まいも、どこことなく。この二ヶ月に目にした誰とも違って。

見た目や雰囲気こそつくりでも、そうであると決まったわけではない。日本人によく似た別の人種が、この世界に存在しているもおかしくはない。そういう可能性も、ないではないけれど。

「……どうか」

掠れた、疲れ切ったような声がえう。

「その梨を一つ、恵んではいただけませんか」

「馬鹿を言うんじゃない」

商人は一蹴した。一喝した、と言いたくなる剣幕だった。鏢一文負けないと譲らないところへ、恵んでほしい、つまりただでよこせと頼んでもそれはそうなるだろうが、

「坊さんに対してもそうなのかい、あんたは」

これまでは聞かれなかつた非難が飛んで、シユリにおける聖職者という存在の扱いが窺えた。

……梨売りに、お坊さん。

「ね、コルリさん」

連れの袖を引いて志穂は声をひそめた。

「十五ドゥ持つてる？」

「ヒタキと合わせれば、多分ね」

コルリはヒタキを見、ヒタキは志穂を見た。

「あいつに買ってやるうっていうのか？」

「うん。試してるのかもしれない、あの人」

自分こそ試すような気持ちで、少女は修行僧を注視した。

第4章 梨売りを懲らす語(こと) 3

ヒタキは肩を竦め、コルリの前に手を突き出した。コルリが貨幣を握らせ、失礼、と前方に声をかけて道を開けさせる。

「十五ドウドウだったね？ 一つ買おう」

すたすたと出てきてさりとと言う男に、梨売りは一瞬毒気を抜かれたような顔をした。買った梨をそのまま修行僧へ差し出すのに、そういうことかと今度は渋い顔になる。修行僧は両手を合わせて拝むようにしてから受け取った。

「お礼を」

聞き取りづらかったが、そう言ったらしい。

「わたしの梨を差し上げます」

「……何だつて？」

ヒタキは眉を寄せた。

唇の端を軽く吊り上げて、聖職者らしくなく、青年は笑んだ。梨を両手で包むようにして持つ。

「欲しかったのは、この種ですから」

途端にパシツと音がして、刃を入れたようにきれいに、梨の実は真つ二つに割れた。

露わになった種を一つつまみ、杖でとんと地面を突くと、畑の土でも突いたように簡単に穴ができる。その中へ種を落として、やはり杖で土を被せるなり、そこからひよこつと双葉が生えた。あつ、えつ、おお、などと単純な叫びが幾つか上がった。

梨の芽はみるみるうちに育って木になり、枝を伸ばして葉を繁らせ、花をつけると花びらを散らした。鈴生りに実をつけるまで、六十秒もかからなかった。

下方へ伸びた枝を修行僧がつかむ。先ほどまでの弱った様子はどこへやら、威風堂々、低いがよく通る声を上げた。

「皆様も、是非！」

力強く揺すぶると、枝々から梨の実が降るように落ちた。

ぼかんとしていたのは少しの間で、最初は恐る恐る、その後は夢中になって、人々はそれを拾いにかかった。急成長した木は広場の反対側からもよく見えるわけで、何事かと第二陣も集まってくる。

「いい梨だ」

二つ三つ拾い上げて、ヒタキが戻ってきた。引き込まれるようにみつめていた志穂は、夢から覚めたかのように瞬きをした。本物だな、とコルリが興味深げに覗き込む。

梨の実を残らず振るい落とすと、青年は杖を持ち直してその幹を打ち始めた。こん、こん、と小気味よい音がするたびに、木が少しずつ若返っていく。杖と同じほどの細さになったところで、その根元をいきなり杖の先で切ったから少々びっくりした。刃を仕込んであったらしい。

枝も葉も残っている若木を肩に担いで、無言のまま踵を返す。人々は梨拾いに気を取られて、呼び止めも歩み寄りもしなかった。寧ろそれを狙って、場が落ち着かないうちに行こうとしているようでもあった。

「ちよつと追っかけてくる」

そう二人に断わって、志穂はその後について広場を出た。

広場から伸びる道は複数あったが、中でも人通りの少ないところを選んだらしい。一つ目の路地へふいつと入ってしまったので、小走りになって角まで行き、覗き込んだところで足を止めた。別人のように冷たい表情で、青年が向き直っていたのである。

「何の用だ？」

声も冷たかったが、警戒や敵意は感じなかった。用などあるはずがないとばかり、ただ突き放されたただけだ。そう判断した少女は、臆せず正面に立って見上げた。

「あたし、安城志穂っていいいます。二ヶ月前まで日本にいました」
取りつく島もなかった空気が思いなしか和らいだ。理解の色が浮かんだのを見て取り、胸が期待に高鳴るのを覚える。日本という名

に覚えがなければ、今の発言の意味はわからなかったはずで。

と、青年は不意に若木を下ろし、

「話があるなら後にしてくれ」

言うが早いかこちらへ向けて投げ捨てた。

慌ててよけたそれは空中で枝葉を失い、材木となってからんと地面に転がった。気を取られたのは一瞬だったが、その僅かの間に志穂以外の姿は路地から消えていた。

「……えっと」

後って言われても。

一応、拒絶されたわけではないようだが。少女は首を傾げた。

広場まで引き返してきたところで、顔を真つ赤にした梨売りとしれ違った。修行僧を追うつもりだろう、凄い勢いで走っていく。

そういえばあの騒ぎの中では、啞然としてただ突っ立っていた気がする。集まっていた人々が望みの梨を手に入れ、この場に留まる必要もなくなって解散していくに至って、ようやく我に返ったというところだろう。

荷車のそばには連れの二人が残っていた。

「驚きだよ、シホ。これをご覧」

コルリが指さす。異変は一目で呑み込めた。山のような梨が影も形もないのだ。

「あの木は幻だったわけだ」

拾った実を眺めてヒタキが言った。枝から落ちたように見えて、本当はそうではなかったのだ。実が生ったのも花が咲いたのも枝が伸びたのも、いや、そもそも芽が生えたところから、きっと見せかけだったのだ。修行僧本人を除いて、あの木に触れた者はいない。地面に切り株も見当たらない。枝を揺すつたと見せたあのときは、実際には荷車の中身をばらまいていたのである。

志穂は荷車に歩み寄り、横木が一本切り取つてあるのを認めた。切り取つた若木の正体はこれか。路地に投げ捨てた材木と、太さも長さも色味も風味も一致する。

だろうと思った。

同じ展開を経て同じ結末に至る物語を、先から志穂は思い出していたのだった。横柄な梨売りを道士が懲らしめる、確か中国の昔話絵本で読んだから出典は知らない。

細部の違いはある。幻の梨の木を生やす手順は絵本の方が丁寧だったし、自分のようにすぐさま後をつけた者もいなかった。が、それはシンドバッドのときも同じだ。

日本人と思わしきあの修行僧が、幻の木を生やすという芸当をやつてのけた点は少々引つかかる。何せ異世界なのだから、この世界の人間が魔法を使う分には驚かないけれど。こちらへ来てから習つたのだろうか。

「少し気の毒だな」

「あそこで思い直して自分であげてれば、こつはならなかつたんだよ」

梨売りにしてみればかなりの損害だろう。ヒタキの呟きに、フオーのように応じる。尤もそうしていた場合にどのような展開になったかは、昔話と食い違うので不明である。

知ってしまえば気が咎めると、ヒタキは三個の梨を荷車の中に置いた。たつたこれだけ戻ってきてても、雀の涙で焼け石に水だろうが。「さて、あいつが帰ってくる前に宿に戻るか」

次に会つたら怒鳴られそうだと梨売りの去つた方を見やる。最初の梨を買い与えたことで、一味のように捉えられているかもしれない。

「戻るって？」

コルリはわざとらしく首を傾げた。

「あんたの用は済んだのかい、ヒタキ」

「……済んでいないな」

「あ、駿一たちのこと訊いてない」

当初の目的を忘れるところだった。実らないことが多いせいか、今の一件にすっかり吞まれてしまっていたが。シホは忘れちゃいけないだろうとコルリが突っ込み、三人は改めて三方に分かれた。

そうして始めた聞き込み自体は例の如く空振りだったが、その過程であの梨売りの話を何度も耳にした。ついさっきにすぐそこで起こつたことなのだから無理もない。聞く限りではシユリの人々は、先の一件を爽快に感じているようだった。独占市場であるのをよいことに、このところ年々値を釣り上げていたそうで、買えば高いし買わなければ寂しいしでささやかに困っていたらしい。

その梨売りが戻ってきて悪態を吐くのが聞こえ、それを潮に三人は広場を離れた。

「一度痛い目に遭った方がよかったのかもな」

「ああ、とうとうヒタキさんにも見捨てられた」

「誰彼構わず当たり散らしてるようだったね。あれじゃ同情も失せるってものさ」

結論がそうなったことに、何というか、安心する。あれはやりすぎだと青年を批判する流れになったら、同胞らしいと親近感を抱いている自分としては、流石に気まずかつただろう。

それにしても、けりがついた今になってもあの件について話しているのは、どこか妙な気分だった。幻だったという種明かしがあり、梨売りが僧侶を追いかけ始めた辺りで、昔話は終わるのである。周りの人々の反応を突っ込んで描かないし、懲らしめ方として果たして妥当かという評価は物語の外でするものだ。

物語と現実の違いはここにある。物語はどこかで終わるが現実は途切れずに続く。物語風のこの世界には、物語の『その後』があるのだ。それはそれでおもしろそうな、物語によっては夢が壊れることになりそう。いや、壊れるも何もこの世界のことは、物語めいていようが現実なのであるが。

そんなことを考えているうちに宿に着く。たまたま先頭にて扉を開いた志穂は、そこでもう一つの『その後』に遭遇した。

「遅かったな」

迎える声に目をぱちくりとさせる。

「なんでいるの？」

「この村の宿屋はここだけだ」

やり込めて楽しむ風でもなく、解答は淡々としていた。

宿屋といっても一階は食事処で、宿泊客でなくても利用できる。

入り口に近い席に就いて、あの青年が待ち受けていた。

尤も今は足許まで届く長い上着をまもって、先ほどとは印象がかなり異なる。全体的にゆったりしているという点はこの辺りの民族衣装と共通するが、アラビアンナイトらしさは特に窺えない。

フードもついているようで、寧ろ魔法使いのローブを思い出す。色は黒くも黒に近くもなく、薄くて地味な枯草に似たそれなだけけれど。僧服を下に着ているのかどうかは、完全に隠れていてわからなかった。杖は見当たらない。

「連れだったか。ちょうどいい」

後ろにいるヒタキに気づき、大きな袖の中へ一度手を引っ込めて、五ドウ貨幣三枚を取り出して渡す。本物だろうね、とヒタキは茶化した。

「あんた、催眠術師かい」

「似たようなものだ」

コルリを適当に受け流して、青年は志穂に目を向けた。

「安城だったな」

「あ、はい。安らかな城に、志すに稻穂の穂です」

漢字の説明が来るとは思わなかったのだろう、素に戻ったような顔をする。

「 須藤昇。上昇の昇だ」

釣られたように空中に指で綴った。その跡を一瞬感慨深げにみつ

めたのは、しばらく書く機会のなかった表記だからだろうか。

「やっぱり日本人なんですね」

「同郷なのか？」

「よかつたじゃないか」

目を睜り、肩を叩いた連れたちに笑い返す。同じ世界の、同じ国の人間。友人どころか知人でもないのに、遭遇できたことがこんなにも嬉しいとは。

考えてみれば十分にありうる事態ではあった。何も自分たちは新技術を編み出してこちらの世界へ乗り込んできたわけではない。事故のようなものなのだから、同じ目に遭った人間が他にいても何らおかしくないのだ。

ゆっくり話すといいと言って、ヒタキとコルリは部屋へ引き上げた。志穂と昇は食堂の反対の隅に移動する。入り口のそばでは落ち着かない。

「いつからこっちにいるんですか？」

「八年前だ」

「は」

少女は目を円くした。

「そんなにいて、帰れてない……？」

「帰る努力をしていないからな」

「えっ」

「帰る必要はない。帰る気もない」

何年経とうがこちらの世界にいるのは当然だと、昇はそっけなく教えた。

帰らない、という発想のなかった志穂は驚いたが、言われてみればこれもありえない話ではない。世の中にいるのは幸せな人間ばかりではないのだ。元いた場所が戻りたいような場所であるとは限らない。そうした心境になった自分は想像もつかないにしても、そうした心境になる人間を否定することはない。異世界に留まることの方を選ぶとは、どんな環境だったのだろうと気にはなるけれども。

と、

「帰る気であるなら忠告しておく。この世界を詳しく知るな」

不意に昇は真剣な、厳しいほどの顔つきになった。

魁が教わったのと、それは同じことだった。志穂には知る由のないことであつたが。

「人の名や町の名を覚えるな。聞いても忘れる。連れが二人いたな、あいつらの名を呼ぶのもよくない。意識するのもだ。そもそも少数の集団がまずい、少ない分一人一人と馴染みすぎる。一ヶ所に留まらずに動いてるのは正解だが」

「待つて待つて待つて」

注意事項の洪水を堰き止める。

「いけないことなの？　なんで？」

「知るほどこの世界に縛られる。取り込まれなくては適当に距離を置け」

「……そういうこと」

抽象的に言つてしまえばそれで済むところを、具体的に挙げていくからきりがなくなるのだ。

といつて、縛られるの取り込まれるのと聞いただけでは、理解できたような気にはなつても、何にどう注意すればよいのかは把握できない。三人で旅するのが望ましくないことであるなど、自分では考えつかふなかつたろう。

……望ましくないのか。ヒタキとコルリと旅を続けては。

尤も、いつまでもあの二人と一緒にいるつもりは最初からなかつた。進んで付き合つてくれるから厚意に甘えてきたけれど、本当なら二人はとつくに宝谷へと引き返しているはずなのだ。月日が経ちすぎないうちに、機会をみつけて独り立ちするべきとはわかつていた。ただ、言うなれば二人のためにであつて、自分自身のためにと
いう意図はなかつたのだが。

機会。

ぱつと見上げた。

「昇さん、どこかに住んでるんですか？」

「いや」

眉を寄せたのは話の繋がりが見えなかったためだろう。

「取り込まれるのは構わないが、住み着きたい場所もないからな」

「じゃ、旅暮らし？」

「だったらどうした？」

「一緒に行ってもいいですか？」

単刀直入に言う。

「……何？」

「だって、今のままじゃまずいんでしょ？」

志穂はにこにことした。

機会と言うなら、今こそがまたとないそれだ。同郷の人間であると同時にこちらのことにも詳しい人物など、そうそう捕まえられるものではない。しかも今の同行者は危ないと言い出した張本人であつて、その理由は自分以上に理解している。

昇は呆気を取られている様子だった。そんな話になるとは明らかに考えてもいなかったのだ。物語としては、大して珍しい展開でもないのだが。

いずれにせよ、あの二人から離れると勧めるのは、そのままでは一人になれと強いるのと同義である。中学生の少女に、異世界で。

「一人じゃ心細いんで」

ちつとも心細そうには映らなかつただらうけれど。

「……好きにしる」

言い捨てて席を立ったので、え、ちょっと、と慌てて声を上げる。

「まだ話したいことあるのに」

「今じゃなくてもいいだろう」

この先一緒にいるつもりなら。

そういう意味だと悟って、はい、と志穂は満面の笑みを咲かせた。

第5章 友と会う語（こと） 1

昔話に出てくる村みたいだな、というのが一見しての感想だった。ぼつぼつと立っている家々は、適当で曖昧な『昔』のイメージを具現化したようだ。もう少し具体的に言うなら、東洋の農村を思わせる。

北東へ一ヶ月。予言が示したのはこのことということになる。友人の一人に会えるはずの。

どうやって捜そう。捜さなくてもみつかるもんな。

期待もあれば不安もあれば、微かな緊張もある。緊張するような相手ではないのにおかしく思いながら近づいていくと、人目を気にするようにしながら出てくる一つの影が目についた。

ぼかんと数秒立ち尽くしてから、魁は駆け寄った。

「速水！」

「うお！」

急に呼ばれたためか抱きつかれると思ったのか、飛び退くようにして振り返ったのは、見て取った通りの駿一であった。

「え、夏木？」

「何だよ、ソッコージャンカ」

捜すまでもない、が正解だった。構えていた自分がおかしくなつて、少年は朗らかに笑った。

「何がだよ。つてか大声出すなっ」

他方の少年は慌てた様子で、押し殺した声で叫んだ。あ、悪い、と魁は口を押える。何だか知らないがこそこそと出てきていたのだ。つた。

「何かあったのか？」

「この辺にいるの見られるとまずいんだよ。ていうか急いでんだ。後で」

「……て、おい！」

再会の感動も特に噛み締めず、どこへか向かおうとするのについて抗議する。何やら事情があるようだし、急ぐなら仕方ないにしても、そんな学校帰りに呼び止められた程度の反応で済まさなくても。

が、数歩行つたところで駿一は立ち止まり、違えよ、と自分に突っ込みを入れながらぐるりとこちらを向いた。

「ちょうどいい。手伝え、夏木」

「は？ いや、いいけど、何を」

「場所替えて話す。 あー、つるんでんの見られてもあれか」

村の方へ引き返そうとして、はたと再び止まった。忙しいなと思いつつ、それって、と魁は手を挙げた。

「俺だつてわかんなきゃOK？」

問いかけるような視線を受けて、教わった呪のうちの一つを唱える。ふつと視界が揺れて目の位置が高くなった。駿一を見下ろして微笑したときには、魁はあの兄弟子の姿になっていた。

姿形を自在に変える術。実在の人物にしかかなれないわけではないけれど、ゼロから思い描くよりモデルがいた方がやりやすい。悪用しようとするればできそうだが、そういうことは思い浮かべもしないように気をつけていた。兄弟子の二の舞を演じないように。

「これでどーよ」

声も兄弟子のそれだ。発声している本人にはしかとはわかりかねたが。

見覚えのない顔を、駿一はじつとみつめた。

「おまえ本当に夏木か？」

「あ、いや」

本気らしい顔つきと声音に焦る。そう来るとは予想外だった。確かに友人の知る限り、自分にこんな芸当はできなかったのだ。

「仙人のところで習ったんだよ。変身呪文」

そう言っても疑わしげな表情は変わらない。

「じゃ、パンチに化けてみ」

本物なら通じるはずだと試すように、駿一は唐突な名前を出した。

「……人間じゃねえじゃん」

通じたと示すようにそんな言い方をしてみたが、無言で促されて溜め息を吐き、先の呪を再び口にする。景色がしゅるっと上方に飛んで、白地に茶色い模様の毛皮をまとった猫に、青年はたちまち成り変わった。パンチというのは二人の中学校の近所に出没する猫の呼び名であった。

模様は少々うる覚えで細部は違うかもしれないが、一応それと認められる姿にはなったのだろう。ややあつて、駿一は魁をつかみ上げ、ん、パンチだな、と呟いた。

「もういいだろ、戻るから放せよ。つうか持つなよ」

「戻んな。これの方が都合いいから」

普段通りの口調になったのは、疑念が晴れたためだろう。本物の猫のように抱え直されて複雑な気分の魁を連れて、駿一は村へと踵を返した。

第5章 友と会う語（こと） 2

明日のうちに牡牛が産んだ仔牛を献上せよ。従わなければ罰として妻を取り上げる。少し前に赴任してきた新しい役人が、牛飼いを呼び出してそう申し渡した。

異世界といっても何でもありの世界ではない。牡牛が仔牛を産むことなどありえない。目的が妻を奪うことにあるのは明白だった。牛飼いの妻は村一番と評判の美人であつたから、どこかで見かけて気に入る、自分のものにと考えたとしてもおかしくはなかつた。

村を抜けて先ほどとは全く違う方向に出、開けた川辺に腰を下ろして駿一はそのように説明した。見晴らしがよいから誰かが来ればわかる。少年と猫が喋っているのを、知らないうちに聞かれる心配はない。

「回りくどいやり方するなあ」

ここまであからさまな無理難題を吹っかけられるのなら、問答無用で差し出せと命じても同じことのような気もする。

「形だけでいいから筋が通つてるようにしときたいんだろうよ。そついうとこびりつつか、度胸ねえんだ」

「よく知ってるな」

「俺、今役人とこに貸し出されてるから」

「……どこから」

「長者んとこ」

説明が最低限すぎる、と猫は頭を抱えた。

「何、長者？ のとこに、いたわけ？」

「常世の国から来たって思われててさ。珍しい縁起いいし自慢になるってんで、手許に置いたきたがつたんだよ」

「とこよ？」

「別の世界から来たつつたら、なんかそついうことになった。あとあれだな、動物と喋れるから、何しても普通の人間じゃないって」

「え、何だそれ？」

目を円くすれば、気がついてなかったのか？ と返ってきた。日本語ではないはずの言葉が理解できるように、耳を傾ければ動物の言葉も聞き取れるらしい。

「常世ってそういうものなのか……？」

「この辺ではそういうものらしいぞ」

ともあれ、機嫌を取ろうとした長者が着任に当たって派遣したため、現在駿一は役人の付き人のような位置にいたのだ。飽くまでも派遣であって献上ではないのは、手放すのは惜しいから、らしい。ケチなんだよ、と駿一は評した。

「最初はともかく、ずっと見てたら違うって気づかないかね」

「どーゆー意味だよ」

話戻すぞ、と少年は猫を睨んだ。

理屈をつけなければ横暴になれない性格上、理屈でへこませればあの役人は引き下がるだろう。駿一はそう考えて、牛飼いに対策を教えに行こうとしていたのだ。人目を気にしていたのもそのためだ。村人の多くは役人よりも牛飼いに味方するだろうが、念には念をとるところである。

ちようどいいというのはつまり、代わりに行ってこいということかと魁は頷いた。人間の姿でない方がよいのも、結託していると知られないからで。

「で？ 対策ってどんな」

「似てんだよな。志穂に聞いたことある話と」

直接の答えにならないことを言って、駿一は腕を組んだ。

「安城にってことは、どっかの昔話とか？」

「ん。牡牛の産んだ仔牛つても、駄目だったら妻をつつても」

だから、その話を真似れば望ましく片づくのではないだろうか。幼馴染みはそれと知らず、志穂と同様の推測をした。

「そう上手くいくか？」

「聞き耳頭巾ときはいった」

「……意外と詳しいんだよなあ」

聞き耳頭巾が昔話の題であることはわかったものの、ストーリーを思い出せなかった魁はしみじみと呟いた。展開を真似てみる以前に、あの話に似た状況だな、と気づくことが自分にはできそうになり。

志穂に散々聞かされてんだよ、と駿一は心外そうに唇を尖らせた。悪いともおかしいとも、こちらは言っていないのだが。

とにかく、前列はあるらしい。

「それを教えてくればいいんだな？」

「ん。あ、いや、そうでもねえな」

もう一声、と友人は指を一本立てた。

結局伝達のみならず、実行も引き受けることになった。作戦上本人が行くわけにはいかず、向こうの狙いが狙いであるから妻が行くのも危ないのである。昔話の方では夫婦の一人息子が務める役らしい。

「牛飼いの代理で参りました」

名前を出さなくても『牛飼い』で通じるのはよかったと思いがながら、役所を訪れた魁は告げた。この世界に取り込まれないためには、町の名と同じく人の名も、要するに固有名詞は、覚えてはいけなはずだ。

あの後、魁は猫の姿のまま村の外へ行き、牛を追っていた青年をみつけてその前で人間に戻った。驚く青年に駿一の知り合いだと言えば、納得の表情で常世の者かと返されて、本当にそう信じられているのだなと実感した。駿一の要請で助太刀に来ただけ伝え、昔話に似ているという話をしなかったのは、根拠としてはどうしても頼りないと言おうか、疑わしくなるからだ。例えば鬼退治に行く破目になったとして、黍団子を餌に犬猿雉を連れていけば勝てるさ、と言われても果たして安心できようか？

役人の前に通されると、そのそばに駿一が控えていた。魁、と目を睨った様子はなかなか迫真の演技だった。

「知人か？」

「あ、はい、故郷くにの」

きよとんとしたまま、役人への返答はそれで済ませる。

「何だよ代理つて。なんでおまえが来るんだ」

「おまえがいるって聞いて会いたくなっただんじやないか」

魁はにっこりとした。よくやるよ、俺も。

「ところでカイとやら、牡牛の産んだ仔牛はどうした」

にやにやしなから役人が問う。常世の者であろうと、そんなもの

を連れてくるわけにはいくまいとばかり。

顎を上げた。引き受けたからにはこの期に及んでは、懷疑や不安は捨ててかかる。

「はい。ご命令通り、牛飼いが探しに行こうとしたんですが、急に腹が痛み出しまして」

に、と歯を見せた。

「長引くしどうなるかと思ったけど、やっと今朝になって男の子を産みました」

「何だと」

「昨日はそれで捜すどころじゃなかったし、今日も動けそうにないんで、俺が代わりに」

すらすらと述べるのを短い嘲笑が遮る。無理もないし想定通りなのだが少しカチンと来た。ふん、見てろ。

「言つに事欠いて何を申すか。男が子を産んだだと、馬鹿も休み休み」

「ばっ」

駿一が焦った声で発言を止めた。

何事かと振り向いた役人は、その引きつった顔つきに当惑したらしい。してやったり、という表情を魁は作る。

「男は子を産まない。牡牛と仔牛はいかがです、お役人様？」

役人は目を剥いた。少年はわざとらしく笑んでみせた。

睨み合ったような形で、そのまま数秒が過ぎた。時間が経つにつれて逸らしたくなってくるが、耐える。

「……おまえ、それ言わせに来たのか」

ようやく駿一が口を開いた。

「おい、シユン」

「諦めましょう。自分ではつきり言つたんだから。俺らの前で」

む……と呻る役人を見やっけて駄目押しのように続ける。

「男が子供を産まないのなら、男の牛だって子供は産まない。そりゃあそつだ」

「じゃ、あの命令は？」

「命令じゃねえよ。謎かけだ」

役人の体面を保とうとしているかのような口ぶりで、駿一はそういうことにしてしまった。上手く返したんだからそっちの勝ちだ、と宣言して振り返ると、役人も慌てて尤もらしく頷いた。

「ありがとう……！」

「自ら動いてくれるなんて……！」

夫婦が手と膝をついて床につくほど頭を下げるものだから、魁は困惑してしまった。

「いや、そんな大したことしてないし、常世とかいうのは誤解だし……ていうか考えたの速水だし」

神秘的で特別で畏れ多い存在と思われるのも落ち着かなければ、友人の言うことを聞いたただけなのにここまで感謝されるのも何だか居心地が悪い。

「それに、これで引き下がるとも限らないし」

時間がなかったから詳細には聞いていないが、駿一が手本にした昔話では、冬にもう一度しかけてくるらしい。少なくともそれまではこの村にいて、そのときはまた助けてやれと友人は暗に言ったようだった。

渋ったというほどでもないが、志穂と美寒を捜しに行くことは、そうなるとしばらくできないなと思った。今になってそのことに、罪悪感のようなものを覚える。自分にとっては重要なことなのだし、それを理由に手助けを断るつもりでもないのだけれど。

「だから、あの、しばらくここにいてもいいかな？ 心配だし」

「ああ、勿論。もう冬になるから、春まで旅はやめた方がいい」

この辺りは雪が深いから、と牛飼いは忠告した。やっと普通の人間として扱われたような気がして、ありがと、とほっとして少年は返した。

特に隠しもしなかったから、常世の少年がもう一人現れたという話は、長者の耳にも入ったかもしれない。駿一のように手許へ置こうと働きかけてこないのは、役人に喧嘩を売ったことも伝わったためであろうか。役人について役所にいる駿一に、おかげでうっかり会いにも行けなくなってしまった。すぐそこにいると互いに把握しているのにもどかしいことだ。

冬になると雪の日が多くなった。降らない日も冷え込むから、積もった雪はなかなか溶けない。牛飼いの言った通り、旅を続けるのはいずれにせよ困難だったろう。慣れない雪掻きや牛の世話を手伝ったり、術の練習をしたりして魁は過ごした。仕事の呑み込みはやはり妙に速かったが、術の方は必ずしもそうはいかず、それが本当だよなとも肝腎のところでは何だよとも思う。

冬が半分過ぎた頃、これは駿一の言った通りに、牛飼いが再び役所からの呼び出しを受けた。帰ってきた青年から仔細を聞くと、少年は鳥になって役所へ急いだ。

「速水」

鳥の姿であろうとも、呼べば自分であることは伝わる。窓辺を振り返って、来たな、と友人は口の端を上げた。

「ここじゃまずいか。川行ってる？」

「ん。適当に抜けてくわ」

誰かに聞かれても面倒だ。身を翻して今度は例の川辺へ向かう。一度パンチの姿を借りたが、何だか寒さが増した気がして犬に切り替えた。雪の残る水辺で猫はなかった。

駿一もやがてやってきて、あの犬がそうだろうかと思つうように足を止めた。寒いのに待たすなよ、と声をかければああ合つてたという顔をして、毛皮あんだろ、と返してきた。

「中身聞いてる？」

「苺だろ」

山へ行つて苺を摘み、明日のうちに献上せよ。従わなければ罰として妻を取り上げる。役人は今度はそのように命じたという。牝牛の産んだ仔牛に比べれば現実味があるように感じたが、ビールハウスの中ならばともかく、雪山に苺があるはずはない。

これも志穂に聞いた話と同じだと頷いて、小出しにすることもないからと最後まで、昔話のあらましを駿一は語った。役人の目的はこの先、美しい人妻を手に入れることから、小憎らしい少年に仕返しをすることに移行していくらしい。その役を押しつける前に教えるよとも思つたが、心配せずとも勿論毎回少年が勝つことになっている。その辺り、昔話というのは単純だ。最後には役人の娘と結婚し、親と違つて気立てのよい妻と幸せになるのだとか。聞いておいてよかつた、そこは回避策を考えておこう。

牛飼い夫婦に息子がいなかったように、昔話と完全一致するとは限らない。そもそも元の話では、役人に目をつけられたのは『牛飼いの妻』ではなく、駿一に相当する登場人物もいなかったというし、先のこと完全にかかるわけではないのだ。目の前を解決するための参考になるだけのこと。逆に言えばひよつとしたら、あの役人は魁打倒に燃え始めることなく、今回で完全に引き下がるかもしれないわけだが。……そうと判断できるかはさておき。

「いつになったら次行けるんだか」

猫はぼやいた。乗りかかった船は構わないにしても、降りたかどうかわかりにくいのは少々困る。

「次？」

「ほら、安城とか五十嵐さんとか帰り方とか捜しに」

言いながら見上げると、友人は何か妙な顔をしていた。

「……行くだろ？」

「……そんなこと言ってねーけど」

いつの間にかそんな話になっているのだと、実際不思議そうな、というよりも不審そうな調子だった。

「え……」

「俺ここ、結構気に入ってるし。別にこのままでいいんだけど」

「何、え、帰らない気おまえ？」

「日本人だって外国住むし、外国人だって日本住んでんだろ」

異界と異国を同列にするな、大体異国にだってそうあっさりとは移住しないだろう、などと突っ込むのも忘れて、魁は口を開けて友人を眺めた。

彼方を我が世と定める限り、彼方の人間であるという、仙人の言葉が蘇る。此方を我が世と定めれば、彼方の世は影となるとも言った。取り込まれば帰れなくなると。

これが、それなのではないか？

「……ヤバいつてそれ。マジで帰れなくなるって、そういうこと言ってるよ」

「いや、だからマジで別にいいし」

本気にしていないのか、信じた上で言っているのか。本当だって、と慌ただしく説明したが、友人はぎよっとする風も焦る風もなかった。おまえも帰るなとは言ってねえよ、となだめられる始末で少年は呆然とした。

どう反応してよいものかわからない。認めるべきか責めるべきか、嘆くべきか。自分は 決めつけていた、のか？

駿一は駿一でそんな魁に戸惑った様子だったが、気まづくなったのかどうか、そろそろ戻らないとまずいわ、と立ち去ってしまった。帰らないというだけでなく、志穂たちを捜すつもりもないようだったと、その後になって魁は気がついた。

「毒はどうした。見当たらぬようだが」

「はい。ご命令通り牛飼いが探そうとしてたんですが、途中で蛇が出て噛まれました」

「蛇だと」

「何とか帰ってはきましたが、毒にやられて寝込んでしまいました。今朝になってもうなされてるんで、俺が代わりに」

「黙れ」

かっとしたように役人が怒鳴る。

「冬に蛇が出るものか。そんなことで騙されるとでも」

「冬に蛇は出ないと。毒はいかがです、お役人様」

これで詰まってしまうところにいつそ可愛げを感じる。それとこれとは別だとか口答えをするなどか、うるさいとか生意気だとか、怒鳴りつけてねじ伏せることもできるだろうに。常世の者と信じる人間が二人も立ち会っているためかもしれないが。

「み……見事な切り返した。やるのう、カイよ」

「ありがとうございます」

威厳を保とうと胸を張る役人に澄まして礼を述べながら、傍らの駿一にちらと目をやった。役人側の人間らしく唇を噛み、けれどもそれによって負けを強調している。細かい演技をしている余裕が、憂いも迷いも気懸りもない証拠に思えた。

……気にしてもないのかよ。

作戦自体は成功しているのに、晴れない気分少年は役所を後にした。

やがて三度目の呼び出しがあった。

「近々都に行くから、君を連れていきたいって言うんだ。シユンは長者のものだから、そこまで連れ出すのは悪いって」

駿一に聞いた話と、この展開は合致する。牛飼いは困惑していたが、魁の方はそれ自体には驚かなかった。ただ、来たかと 来てしまったかと、思った。

「猫撫で声でさ。何か企んでいそうだったよ。どこかで君を殺すつもりじゃ」

「適当に逃げるから大丈夫だよ、やりそうなこと見当つくし。……けど、そしたら多分、ここには戻ってこれないかな」

村の名も場所も特定してはいけない。その禁止を守った上で、望んで再び訪れるのは至難の業だろう。役人一行はやがて戻ってくるだろうけれど、役人から逃げるにしても志穂たちを捜すにしても、自分は離脱する可能性が高い。

一人ならそれでも構わないのであるが。

「そうか。寂しくなるな」

「……駿一は置いてくんだよな？」

呟いた。問題はそこだ。

長者から借りている以上は連れていけない。口実にせよ本音にせよそう言っているのだから、駿一はこの村に留まることになる。魁には戻れないこの村に。

「俺……あいつを、連れ戻しに来たみたいなものなのに」

一緒に帰ろうという意志が駿一にもあるのなら、何かしらやりようもあるだろう。けれども友人には、どうやらきれいさっぱり、そのつもりはないのである。

そんなにも未練がないのだろうか、縁を切りたくなるような場所だったかと考えていたら、あの世界の悪い点をあれこれ思いつけてしまった。選択肢がなかったから表面化しなかったのであって、本心では愛想を尽かしていたのだろうか。幸せいっぱい毎日をごしているようには、確かに特に見えなかった。例えば志穂には、そんな空気があったけれども。

何が何でも帰れと強いるような根拠はこちらも持っていない。当然と思っていたことなのに、理由をみつけようとするとこんなに難

しい。

だからといって。

「仲違いしたわけじゃないんだろっ？」

牛飼いが励ました。

「話してきなよ。考えが変わることもあるさ」

「まあ……」

それは、確かに。現に今、自分が悩む破目になっているように。行ってみたらあっさりと乗り換えているかもしれない。

「……だな。ん、ちよっど行ってくるよ」

いずれにせよ、努力はするべきだ。

すっかり慣れてきた呪を唱えて、いつもの鳥に少年は成り変わった。説得する自信があるとは、正直言いがたかったけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6435t/>

われても末に

2011年10月27日22時03分発行